

GRUPPO DI FAMIGLIA IN UN INTERNO

君が望む永遠 二次創作小説
家族の肖像

有栖山葡萄

ほどよく焼けたトーストの香りが、リビングに広がる。

テーブルには他にコーンスープとサラダが用意され、朝食の支度は終わっていた。

そろそろ娘を呼ぼうと水月が思っていると、こちらに向かつてくる軽い足音が聞こえた。

「お母さん、おはよう」

ランドセルを持った娘が元気な声で挨拶しながら、リビングに入ってくる。

「おはよう」

声をかけ、ホットミルクのはいったマグカップを二つテーブルにおくと、娘が席に着くのに合わせ彼女も椅子に座った。

「それじゃ食べましょうか、いただきます」

「いただきます」

二人は手を合わせ、食事を始めた。

「今日から四年生ね」

「また、智恵美ちゃんと一緒にのクラスになれるといいな」

学校が始まるのが嬉しいのか、娘はニコニコしながらイチゴジャムを塗ったトーストをかじる。

「ほんとに仲が良いのね、ずっと同じクラスでしょ」

「幼稚園からずっと一緒だよ」

「そっか、また一緒になれると良いわね」

「うんっ」

新学年への期待に顔をほころばせる子供をみて、水月は微笑ましくて和んだ。

「あのね、智恵美ちゃんがね、……」

娘の話聞きながら、水月は頭の隅で今日の予定のことを考えていた。

「お母さん、どうかしたの？」

娘に呼ばれ、考え事に気をとられていたことに気づく。

「ごめんさいね。お母さん、午後から少し出かけなきゃいけないって、ちょっと考え事しちゃってた」

「そうなんだ」

心配そうな顔をする娘に、心を痛める。

「お昼ごはんは冷蔵庫にしまっておくから、チンして食べておいてくれるかな。夕方には帰ってくるからね」

優しく諭すように言うと、娘は「うん、わかった」と、素直に返事をする。

「ごめんね」

一人にすることだけではなく、水月には他にも後ろめたいものがあった。だけどそれを表に出すことはできない。

「できるだけ早く帰ってくるから、晩ご飯を一緒に作りましょう。なにか食べたいかな」

「うん、うん」

「えっと、ロールキャベツがいい」

「うん、うん」

「じゃあ材料買ってくるから、がんばって作ろうね」

「うんっ」

嬉しそうに言う娘の手元を見ると、ちょうど食事は終わっていた。

「ごちそうさま、学校いつてくるね」

「はい、気をつけていつてらっしゃい」

立ち上がりランドセルを持ってかけ出す駆け出す娘に、走って事故にあわないように声をかけると、「わかったあ」と言う返事と、ぱたりとドアの閉まる音が聞こえた。

「ふう」

娘が出かけたことを知り水月のため息をつく、ひとり食事を続けた。もともとトーストをかじり、傍らに置いていた手帳を確認をする。

『一三時 櫻総合病院／⑮』

今日の欄には、予定が二つ書き込まれていた。

彼女はまたひとつ「ふう」とため息をつく。

「やっぱり聞かない方が良くないかな」

誰とはなく呟くと、トーストの最後の一片を口に入れ、冷めたホットミルクで流し込んだ。

「そんなの誰にもわからないか」

あきらめの嘲笑を浮かべる。

「でも、もし、だとしたら、どうなっちゃうのかな……」

ぼんやりしながら考えていると、思考が同じところをぐるぐる回って抜け出せなくなっていく。

「とりあえず、やること片付けなきゃね」

水月はよしと勢いをつけ立ち上がり、食器を片付けて洗濯を始めた。何年もの間身についた家事を、無意識のうちに済ませていく。そうやって身体を動かしている間は、余計なことを考えなくて済んだ。

そして昼前には身支度を終わらせ、櫻町へ向かうことにした。

「ほんと、あの病院には良い思い出がないわね」

あの病院にまつわる因縁を思い出し、彼女はひとりごちた。

これから聞きに行く話も、その結果がどうであれ決して良い話ではない。しかしだからといって、彼女は逃げ出すこともできないでいた。

水月は重い足取りで、病院へと向かっていった。



時刻はすでに一五時になっていた。病院で話を終えた水月は、次の約束の場所に到着している。

予想は当たっていた。

そのことが自分にとつて良いことなのか悪いことなのか、なにより娘にとつてどうなのか、いまだ判断がつかなかった。

「どうしたらいいんだろ」

自分を混乱させている理由がなんなのか、彼女自身全く理解できないでいた。

「すまない、少し遅れた」

ぼんやり考え事をしていた水月が声をかけられ視線を向けると、そこには待ち合わせ相手の男が立っていた。

「大丈夫よ、さつき来たところだから」

「そうか、とりあえず移動しようか」

「そうね」

二人はそれだけの言葉を交わすと、目的地も話さずに歩き出す。その足取りはすでに行き先が決まっているようであった。

「体調でも崩してるのか？ 少し顔色も悪いようだし、雰囲気もいつもと違う感じがするけど」

様子のおかしい彼女を心配して、彼が問い掛ける。

「そんなことないわよ」

水月は笑ってみせた。

その笑顔の半分は彼を安心させるため、残り半分は彼が自分のことをよく見てくれていることへの自嘲が交じっていた。

「そうか？ それならいいんだけど」

彼女の表情を見ればもう少し聞きたいことはあるだろうに、彼はそれ以上は深くは追求はしない。

彼が側にいることは水月が望んだとはいえ、彼女にはこのくらい少し距離をあげた関係が心地よかった。

「うん、平気だよ」

「そうか」

二人は自分を納得させるように、ゆつくりと言葉を交わす。そして不自然な距離を開けたまま少し速いテンポで歩いていくと、周りの人影は徐々に少なくなっていく。

角を曲がる時さらに道は細くなり、ビルの谷間は昼だというのに陰で薄暗く静まりかえっていた。

奥まった一角にある、高い塀に囲われた建物。

「フリータイム 4800円」と書かれた看板の脇、塀に小さく開いた入口へ二人は消えていく。

建物の中に入り、無人のロビーに設置されたパネルの前に立つ。

彼が手慣れた様子でパネルに一つだけ点灯しているボタンを押し、受け皿に滑り落ちてきた鍵を手にとる。

そして二人はドアを開け待っているエレベーターに、逃げ込むように足早に乗り込んだ。

行き先階ボタンを押すと扉が閉まり、頭上からワイヤーを巻き取る音が大きく響く。妙にがたがたと揺れる小さな密室で、水月が男に身体を預けると彼の手が彼女の肩に回される。

「慎二君」

そつと肩を抱き寄せられ、声を漏らす。

「水月」

呼びかけに顔を見上げると急速にその距離は縮まり、二人の唇が重なった。

軽いキスの先にいく余裕もなく、身体が跳ね上がるような振動と共にエレベーターが止まり扉が開いた。

身体を離すと二人は指をからめ手をつなぎ、404とプレートの貼られた部屋に入っていく。

狭い部屋。

大きなベッド以外には、小さなソファとテーブル、壁に取り付けられた液晶テレビとキャビネット、扉の向こうには浴室があるのだろう。壁紙も照明の暗さもすべては利用者の目的、有り体に言えばセックスをするために作られた部屋だと感じる。だからこそ部屋に入ること、性の快楽への衝動を抑えていた理性の足枷は一瞬にして消し飛んだ。

「慎二君」

服を脱ぐのもどかしいと彼をベッドへと引つ張り押し倒し、覆い被さるように彼の唇を食った。

唇を割って押し入る彼女の舌と、迎え入れた彼の舌が絡み合ひ粘液質な音を部屋に響かせる。二人の口の中には唾液の甘さと口紅の苦さが混じり広がっていた。

「どうしたんだ、みつ……」

あまりにも性急な絡みに、彼は唇を離し彼女の肩を両手で押し上げ顔を見上げる。

そして彼女の表情を見て、言葉を詰まらせた。

欲情し上気した頬に、崩れた口紅が広がり唾液に滑る唇。

そして、輝きのない瞳。

あのときと同じだと、彼は確信した。

違うのは酒に酔ってないことくらいなもので、彼女の身に何かあったのは間違いなかった。

慎二が問いただそうと水月に視線を向けると、行為を中断された戸惑いに泳ぐ彼女の視線が彼をとらえる。焦点のずれた視線は徐々に距離感をつかみ、彼女は慎二の瞳を見つめた。

「おねがい、私のしたいようにさせて」

言葉はお願いといつているが、彼女の視線と言葉は彼にとってはもはや強制力のある命令であった。

「……わかった」

慎二は過去の不安を思い出していたが、彼女に命じられるがままに身体を預けた。

彼だつて自分が惚れている女との情事が嫌なはずがない。

水月は横になった彼のズボンを引き下ろすと、現れた彼のまだ力ない分身に唇と舌をこすりつけてきた。

貪る彼女から与えられる刺激に、彼の肉体は素直に反応する。

水月は彼の昂ぶりように歓喜し、さらに激しく彼のモノを啜え、喘ぎながら欲望をぶつけてくる。

そんな行為の中、彼の意識は急速に醒めていった。